慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	メルロ=ポンティにおける世界の諸位相： 間世界(intermonde)概念を手がかりとして
Sub Title	The several aspects of world in Merleau-Ponty : focus on the conception of intermonde
Author	清水, 淳志(Shimizu, Atsushi)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2008
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学： 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.66 (2008.) ,p.27- 44
JaLC DOI	
Abstract	The aim of this paper is to think about the possibility of Merleau-Ponty' s social theory. Here, I take up his conception of "intermonde" (intermundane space/interworld; in English translation). This is used in Merleau-Ponty 1955, 1964. At first, there is the need of considering aspects of the world we live in his thought. Merleau-Ponty indicates two aspects of intermonde, the sensible world and the historical world, In addition to this two, I try to seek for the third in the latter, it is what can be called the social meaning world. It belongs to the area of people's actions with symbols. Because of this seeking, it can be said that the world we live, in Merleau-Ponty's discussion, has three aspects, And, moreover what to be questioned is the meaning of 'inter' in the conception of intermonde. This 'inter' implies that each of three worlds contains the negatives. Given more detailed explanation, the negative is the invisible in the sensible world, the present in the historical world, the others in the social meaning world. Secondly, I examine the conception of institution (alization) in Merleau-Ponty, making reference to the discussion mentioned-above. This paper especially focuses on the action which causes transformation of institution. Concretely, it is the action of retakingt heinstitutionalized. In Merleau-Ponty 1955, this action is found as retaking choice of ours/others. The point is that the action of retaking is not necessarily subjective when institution is transformed through it. The reason is that it is in relation to the structures of world that the action exists. The structures of world are the three negatives mentioned-above. What to be taken up of three here is the present and the others. Owing to these two elements in the world, the action is signified beyond actor's intention. Though the transformation of institution brings about through retaking signification of action, its result dose not directly reflect the intention whose people do it.
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000066-0027

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

メルロ＝ポンティにおける世界の諸位相

——間世界 (intermonde) 概念を手がかりとして——

The Several Aspects of World in Merleau-Ponty

—Focus on the Conception of Intermonde—

清　水　淳　志*

Atsushi Shimizu

The aim of this paper is to think about the possibility of Merleau-Ponty's social theory. Here, I take up his conception of "intermonde" (intermundane space/ interworld; in English translation). This is used in Merleau-Ponty1955,1964.

At first, there is the need of considering aspects of the world we live in his thought. Merleau-Ponty indicates two aspects of intermonde, the sensible world and the historical world. In addition to this two, I try to seek for the third in the latter, it is what can be called the socialmeaning world. It belongs to the area of people's actions with symbols. Because of this seeking, it can be said that the world we live, in Merleau-Ponty's discussion, has three aspects. And, moreover what to be questioned is the meaning of 'inter' in the conception of intermonde. This 'inter' implies that each of three worlds contains the negatives. Given more detailed explanation, the negative is the invisible in the sensible world, the present in the historical world, the others in the socialmeaning world.

Secondly, I examine the conception of institution(alization) in Merleau-Ponty, making reference to the discussion mentioned-above. This paper especially focuses on the action which causes transformation of institution. Concretely, it is the action of retaking the institutionalized. In Merleau-Ponty1955, this action is found as retaking choice of ours/others. The point is that the action of retaking is not necessarily subjective when institution is transformed through it. The reason is that it is in relation to the structures of world that the action exists. The structures of world are the three negatives mentioned-above. What to be taken up of three here is the present and the others. Owing to these two elements in the world, the action is signified beyond actor's intention. Though the transformation of institution brings about through retaking signification of action, its result dose not directly reflect the intention whose people do it.

1. はじめに

メルロ＝ポンティと社会理論の接点としてしばしば言及されるもの１つに彼の制度化概念がある[1]。この概念については，コレージュ・ド・フランス 1954–55 年度講義要録「個人の歴史および公共の歴史

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程（学説研究）

における「制度化」」(Merleau-Ponty 1968) で以下のように定義されている。

「ここでわれわれが制度化ということで考えているのは，ある経験にそれとの連関で一連の他の諸経験が意味を持つようになり思考可能な一系列つまりは一つの歴史をかたちづくることになる，そうした持続的な諸次元を与えるような出来事—ないしは，私のうちに残存物とか残滓としてではなく，ある後続への呼びかけ，ある未来の希求としての一つの意味を沈澱させるような出来事—のことである。」(Merleau-Ponty 1968: 61＝1979: 44)

ただ，以上の定義だけでは抽象的できわめて分かりにくい。メルロ＝ポンティ自身は，この定義の後に以下の「4 つのレベルの現象を通じてこの概念へ接近しようと試み」(ibid. 61＝44) ている。①動物や人間において純粋に「生物学的なもの」だと考えられている諸機能。例えば，動物が誕生時に周りのものを親だと思い込む「刷り込み」という現象や，人間のエディプス的葛藤。②プルーストの作品に登場する人物が抱く愛のかたち。③絵画（史）における様式の定着。④知の発展のあり方（「知の歴史性」(ibid. 64＝46))。

メルロ＝ポンティは，「はじめの 3 つは個人の歴史ないし間主観的歴史にかかわりをもつものであり，最後の 1 つは公共の歴史にかかわりをもつものである」(ibid. 61＝44) と主張する。しかしながら，例えば②は，あまりに個別事例に入り込みすぎている感があるし，反対に④は，対象領域があまりに広く漠然としすぎていると言わざるをえない。そのため，制度化概念の「4 つのレベルの現象を通じての」分析からだけでは，メルロ＝ポンティが我々の住む世界をいかなる諸位相のもとで成り立つと考えているのかがうまく見えてこないのである。

もう 1 つ，この Merleau-Ponty 1968 は，制度化概念の説明としても不十分な点を数多く残していると言わざるを得ない。これは，講義要録というテキストの性格に起因するところが大きいと言える。特に，社会理論の観点からすれば，メルロ＝ポンティの制度化概念における行為の次元がこの要録からは見えてこないのである。例えば，以下の指摘を見てみよう。

「制度化されたものは，その主体自身の行為の直接の反映ではなく，後になってその主体自身によってであれ，他者たちによってであれ—全面的に再生されるわけではないが—とりあげなおされうる (repris)」(ibid. 60＝44)（傍点引用者）

傍点部から分かるように，ここには制度の変容に関わる何らかの行為が想定されているとは言える。しかし，それが具体的にどのようなものかは見えてこない。このようにメルロ＝ポンティの制度化概念における行為の次元については，この要録以外のものを参照して議論していく必要がある。

本稿では，これら 2 つの問いに答えるために，Merleau-Ponty 1955, 1964 のなかに見受けられる間世界 (intermonde) という概念に注目してみたい[2]。最初に，この概念がメルロ＝ポンティの議論のなかにどのように位置づけられるかについて鷲田清一の以下のような指摘を見ておこう。

「実際，メルロ＝ポンティの思索は終始，さまざまの『実体』概念，あるいは実体論的思考を解体し，それを関係論的に組み換えてゆくそういう作業にささげられたといえなくもない。（中略）かれの

『現象学』のキー概念も〈関係〉概念として構築されているものが多いし，さらに『なにかとなにかのあいだで，そして両者のあいだを理解する必要があるのだ』といわれていたように，最晩年の思索は『間世界』(intermonde) としての世界の構造とその出現の分析に集中しており，こうした世界の開口，〈あいだ〉炸裂，存在の裂開などと呼ばれる出来事の構造的な生成に『内から』立ち会ういとなみを，メルロ＝ポンティは《現象学》と名づけたのである。」(鷲田 1997: 177–178)

以上の鷲田の指摘に従うならば，間世界とは，我々の住む世界を何かと何かの〈あいだ〉の関係性として捉えようとするメルロ＝ポンティの世界観を表現している術語であると言える[3]。事象を関係概念として読み解くこと，これは哲学との位相の違いを考慮に入れる必要はあるものの，社会理論にとっても馴染みのない思考方法ではない。

以下，本稿では次のような構成を取りたいと考えている。まず，メルロ＝ポンティが直接言及している間世界概念の２つの位相，知覚的世界（第２節）と歴史的世界（第３節）について見ていく。次いで，この２つの位相のうち後者の歴史的世界のなかから社会的意味世界の位相にあたるものを抽出する（第４節)。そして，この３つの位相を把握したうえで間世界概念の特性としての〈あいだ〉がどのようなものであるかが考察されることになる（第５節)。ここまでの議論で先に提起した，メルロ＝ポンティが我々の住む世界をいかなる諸位相のもとで成り立つと考えているかという問いに大方の見通しを与えることができる。次に，メルロ＝ポンティの制度化概念における行為の問題であるが，これについては，制度化されたものはとりあげなおされうるものである，という先に見たメルロ＝ポンティの指摘を検討していくことになる。まず，制度変容をもたらす行為としてこの「とりあげなおし (reprise)」がメルロ＝ポンティの歴史社会論 (Merleau-Ponty 1955) のなかでいかなるかたちで見いだされるかを考えていく（第６節)。そして，このとりあげなおしという行為が，第５節で指摘する世界の否定性という構造とどのような関係をとり結んでいるかを見ることでメルロ＝ポンティが考える制度変容のあり方を明らかにしていきたいと思う（第７節)。本稿の目的は，間世界概念を手がかりとして，メルロ＝ポンティが考える世界の諸位相を捉えること，ならびにその議論をふまえて，彼が考える制度変容のあり方を行為の次元から具体的に捉えていくことである。

2. 知覚的世界

では，さっそくメルロ＝ポンティの言う間世界概念がいかなるものであるかを見ていこう。この概念が最も明確に提示されているのは以下の箇所である。

「また完全な存在は，私の面前にあるのではなく，私のさまざまな所見の交叉点や私の所見と他者たちの所見の交叉点に，また私の諸行為の交叉点や私の行為と他者たちの行為の交叉点にあることになるのであり，感覚的世界と歴史的世界とはつねに間世界 (intermonde) なのである。というのも，それらの世界は，我々のいろいろな見方の彼方で，それらを相互に連帯させ，また他者たちの見方とも連帯させる当のものであり，我々が生きるやいなやそれに差し向けられる法廷，我々が見たり行ったりすることがそこに記入されて物や世界や歴史となるべき登記簿だからである。我々の生は，純粋な〈存在〉ないし〈客観〉のまばゆい光に開かれているどころか，その語の天文学的意味で気圧をもっている。それは，感覚的世界とか歴史，身体的生の［非人称的主体としての］ひとや

人間的生の［非人称的主体としての］ひと，現在と過去などと呼ばれるもやにたえず包まれているのだ。それらは身体と精神との入りまじった全体，顔や言葉や行為の混淆であって，それらの間にはいかにしても拒みえない凝集力が働いているのである。拒みえないというのも，それらはすべて，同一の或るものの差異であり，極端な隔たりだからである。」（(Merleau-Ponty 1964: 114-115＝1989: 120)

上記の引用のなかで最初に目を向けるべきは，「感覚的世界と歴史的世界とはつねに間世界 (intermonde) なのである」との指摘である。ここに端的に間世界概念の 2 つの位相が示されているが，このうち本節では，前者の感覚的世界（知覚的世界）を見ていくことにしよう。メルロ＝ポンティは別の箇所でこの知覚的世界を「我々の眼差しがそこで互いに交叉し合い，我々の知覚が重なりあうべき間世界 (intermonde)」(Merleau-Ponty 1964: 72＝1989: 72) であると指摘している。また，同じような指摘は先の引用のなかにも「完全な存在は，私の面前にあるのではなく，私のさまざまな所見の交叉点や私の所見と他者たちの所見の交叉点にある」というかたちで見い出すことができる。これら 2 つの指摘から知覚的世界としての間世界とは，複数の視角をもってなされる知覚の重なりあいのことを示していると言える。存在とは，複数の視角から知覚されることで「完全な存在」となるのである。この知覚的世界としての間世界は，あらゆる存在を対象とするものであるが，とりわけ他者に関しては以下のように語られることになる。

「他者は，我々自身と同じように彼を世界に結びつける回路のうちにとりこまれ，そうすることによって，彼を我々に結びつける回路にもとりこまれることになる。―そして，この世界は我々にとって共同のものになり，間世界 (intermonde) になる。」(ibid. : 317＝398)

ここで知覚は，「彼を世界に結びつける回路」とか「彼を我々に結びつける回路」といったかたちで表現されている。そして特に，他者との関係について言えば，Merleau-Ponty1945 以降，知覚の次元で捉えられてきたし，最終的にそれは「間身体性 (intercorporeité)」(Merleau-Ponty 1960: 213＝1970: 18) として提示されるものであった。知覚的世界としての間世界とは，「我々の知覚が重なりあうべき」世界であり，「我々のいろいろな見方の彼方で，それらを相互に連帯させ，また他者たちの見方とも連帯させる」ものなのである。そのなかでも，とりわけ他者との関係について言えば，それは「身体的生の［非人称主体としての］ひと」の次元で成り立つ間身体的世界のことだと言うことができる。

3. 歴史的世界

次は歴史的世界であるが，これについては間世界概念が使用されている以下の 2 つの箇所を見ておくことから始めたい。1 つは「意識化ないし革命と呼ばれるものは，こうした間世界 (un intermonde) の到来のことなのである」(Merleau-Ponty 1955: 200＝1972: 195) という指摘であり，もう 1 つは，サルトル批判として語られている以下の指摘である。

「問題は，サルトルの言うように人と物しか存在しないのかどうか，それとも我々が歴史とかシンボリズム (symbolisme) とか作られるべき真理と呼ぶところの間世界 (intermonde) もまた存在する

かどうかということである。」(Merleau-Ponty 1955: 278＝1972: 278)

以上の二つの指摘のあいだには，間世界概念が使用されていること以外，一見すると何のつながりもないように見える。また，後者では，間世界が歴史それ自体と等値されており，歴史的世界としての間世界について述べられていることは分かるが，具体的にそれがどのようなものであるかは見えてこない。そのため，ここでは議論の補助線としてもう一つ別の箇所に注目してみたい。

「彼（―サルトル：引用者）は，マルクス主義者の希望そのものであるところのもの，すなわち真の行為においてなされる超克というもの，言いかえれば歴史状況の内的諸関係に適応した行為―この内的諸関係が運動しつつある１つの形態を「とり」また構成するためにはそれを待ちさえすればよいといった行為―においてなされる超克の働きには触れていない。言いかえれば，サルトルは決して革命について語っていないのである。というのは，マルクス主義者の用語法で言うなら，作られるべき真理とはまさに革命のことだからである。」(ibid. 172＝167-168)

最後の１文に目を向けてみるならば，先程，間世界概念として語られていた革命と作られるべき真理がイコールで結ばれているのを見て取ることができる。さらに，この作られるべき真理は，別の箇所では「真理の生成としての〈党〉」(ibid. 164-165＝161) というかたちで〈党〉（共産党）とも同義のものとされることになる。すなわち，メルロ＝ポンティにあっては，革命とか〈党〉（共産党）といった「マルクス主義者の希望そのものであるところのもの」が作られるべき真理（真理の生成）だと考えられているのである。メルロ＝ポンティによれば，「歴史の核としての〈真理の生成〉こそが，マルクス主義に厳密な哲学としての価値を与え」(ibid. 81＝76)（傍点引用者）ることになるのだという。

では，この作られるべき真理とは具体的にどのようなものであろうか，これを見ていくことで間世界としての歴史的世界の内実に迫っていく手がかりを得たいと思う。まず問われるべきは，メルロ＝ポンティが真理は作られるものであるという時，具体的にどのようなことが含意されているかである。議論のヒントとして先程の引用 (ibid. 81＝76) の傍点部に注目してみよう。メルロ＝ポンティによれば，真理の生成とは「歴史の核として」，すなわち歴史の中心的現象として存在している。このことは，真理と言えども歴史との関係において存在するものであること，より具体的に言えば「内具的真理」(ibid. 46＝41) という言葉も使われているように真理は歴史の内部に存在するものであることを示している。では，真理にとって歴史の内部にあることとは，どのような意味を持つのであろうか。メルロ＝ポンティが歴史を「真理検証の唯一の場」(ibid. 47＝42) であると規定しているように，真理は歴史という場において絶えず問い返されることになるものである。絶えず問い返される真理，これはメルロ＝ポンティの言葉で言えば，「絶えざる自己批判によって達せられるべき暫定的全体性としての真理」(ibid. 90＝85) だと言える。

以上の議論から，間世界としての作られるべき真理とは，歴史の内部で絶えず問い返される真理であることが分かった。ただ，真理という言葉があまりに漠然としているためか，間世界としての歴史的世界がどのようなものなのか依然としてはっきりしない。引続きこれを具体化していく作業を進めていかなければならないが，ここでさらに問いとして深めていくべきは，歴史の内部にあることの意味についてである。

メルロ＝ポンティにあってこの問題に対する解答は，Merleau-Ponty 1955 第 2 章「「西欧」マルクス主義」のなかでルカーチ解釈として提示されることになる。我々が歴史の内部に存在していること，それはすなわち我々が「歴史の網の目」(ibid. 47＝42)（「歴史状況の内的諸関係」）のなかに取り込まれているということであり，さらに言えば我々自身もまた歴史的所産として生起する (ibid. 46＝41) ものであることを意味している。そして，我々は歴史の内部にその所産として存在しているがゆえに，「観点なき無条件の真理」(ibid. 47＝42) を獲得することはできず，したがって「我々の知は部分的で偏頗たることをまぬがれない」(ibid. 48＝42)。つまり，我々の知は，常に相対的であらざるをえないのである。メルロ＝ポンティの試みは，このような我々の置かれた相対的状況を極限まで押し進めること（「相対主義の相対化」(ibid. 47＝42)）によって，一種の全体性を見いだそうとすることにある。具体的に言えば，歴史の網の目のなかの一つの結び目として，我々が自らを対象化し，認識しようとするならば，自らを規定する網の目全体（「我々に知られているすべての事実の緊密に結びついた集合体」(ibid. 48＝43)）に目を向けざるをえないことになる。言い換えれば，歴史の内部でその所産としての我々が自己認識に至ろうとするならば，「全体化という課題」(ibid. 48＝43) に従事しなければならないのである。そのため，メルロ＝ポンティが考える全体性とは，自らの相対性を認識することによってもたらされるものであり，それは先に指摘した「絶えざる自己批判によって達せられるべき暫定的全体性」なのだと言える。

ここまで見てきて，メルロ＝ポンティが考える間世界としての歴史的世界がどのようなものかも分かってきたのではないだろうか。それは，我々が歴史の内部にその所産として存在するがゆえに志向せざるをえない歴史的関係性の全体のことなのである。

4. 社会的意味世界

以上の議論から間世界概念の 2 つの位相である知覚的世界と歴史的世界については，ある程度おさえることができた。しかし，この 2 つの位相からだけでは，社会理論が通常対象とする社会的意味世界とでも呼びうるものが見えてこない。本節では，間世界概念のなかにこの社会的意味世界の位相をどのようなかたちで捉えることができるかを考えてみたい。

確かに，メルロ＝ポンティ自身が，この間世界概念に関して社会的意味世界にあたるものを独自の位相として設定しているとは言えない[4]。しかし，本稿では，前節までに指摘した知覚的世界と歴史的世界という間世界概念の 2 つの位相のうち，特に後者のなかに社会的意味世界にあたるものを見い出すことができると考えている。この後者の歴史的世界については，第 3 節で「作られるべき真理」といった言葉が登場するように歴史哲学的な議論が展開されていた。こうした歴史哲学とは別に社会理論としてどのように歴史的世界を捉えることができるだろうか。この問題を考えていくために，第 2 節で引用した箇所 (Merleau-Ponty 1964: 114-115＝1989: 120) にもう 1 度目を向けてみよう。ここで注目すべきは，歴史的世界が「私の諸行為の交叉点や私の行為と他者たちの行為の交叉点にある」とされていることである。歴史的世界から社会理論として抽出されなければならないのは，こうした我々が織りなす諸行為の次元なのである。しかし，このような行為の次元を指摘したからといって，すぐにそれが社会的意味世界の位相に入るわけではない。文字通り社会的意味世界となるためには，我々が織りなす諸行為に付与される意味が捉えられていなければならないのである。そして，これを間世界概念との関わりのなかで見ていく際，重要になってくるのが Merleau-Ponty 1955: 278＝1972: 278 のなかに出てきたシンボリズムの概念なのである。メルロ＝ポンティの議論において，このシンボリズムという概念は，シ

ンボルあるいはシンボル的何々というかたちを含めてしばしば見受けられるものである。とりわけ Merleau-Ponty1955 のなかでこの概念は，意識に意味の源泉を求めるサルトルを批判するために使用されており，それは人間の意識にも物にも還元し得ない第 3 の次元として「固有の効力を持っている〈記号の働き〉」(Merleau-Ponty 1955: 199＝1972: 194) であると規定されている。メルロ＝ポンティとしては，以下にあるように知覚・言語・歴史の各位相で生じる意味の問題を包括する幅広い射程を持ったものとしてこの概念を使用しているようである。

「この類比は，恥ずべき有機体論や目的論としてではなく，〈すべてのシンボル体系 (systemes symboliques)—知覚，言語，歴史—は，それがシンボル体系になるためには，人間的発意によってとりあげなおされる (repris) 必要はあるにしても，やはりそれがもとあったものにしかならない〉という事実への参照と解さねばならない。」(Merleau-Ponty 1968: 46＝1979: 32)

では，先程指摘した我々の織りなす諸行為の次元に対して，このシンボリズムという概念はどのように関わってくるのだろうか。メルロ＝ポンティは Merleau-Ponty 1955: 278＝1972: 278 のなかで間世界の 1 つとしてシンボリズムを取り上げている。注目すべきは，彼がそれに続いて「人間関係が人間的諸シンボルの世界によって媒介されている」(ibid. 278＝278) ことを指摘し「すべての行為がシンボル的」(ibid. 279＝279) なものだと主張することである。つまり，我々が織りなす諸行為とは「人間的諸シンボル」を媒介としたものなのである。そしてこのことから，本節で歴史的世界としての間世界のなかに探し出そうとしてきた社会的意味世界とは，「人間的諸シンボル」を媒介とした諸行為の次元なのだと言うことができる。

5. 否定性としての〈あいだ〉

前節までの議論で間世界概念の 2 つの位相を指摘し，このうちの歴史的世界のなかに社会的意味世界と呼びうるものを探し出す作業を行った。この作業により間世界概念が 3 つの位相を持つものとして提示されることになった。ただ，これまでの議論では，本稿の最初に指摘した間世界概念における〈あいだ〉とはいかなるものであるかという問題が積み残しになっていたと言える。本節では，この問題を考えていくことにしたい。

まず以下の箇所を見てみよう。

ルカーチの言うところに従えば，ある経済的解釈をゆるすような社会生活の諸断片のあいだに，血縁関係や性的関係や神話的親縁関係によって占められるさまざまな『間世界』が挿入されているわけである。ふたたび彼の言うところに従えば，こうした社会は，それを先史時代ないし自然に結びつけている『臍の緒』を断ち切ってないのであり，まだおのれを人と人との関係として定義したことがないのである。」(Merleau-Ponty 1955: 54＝1972: 49)[5]

以上は，第 3 節でも取り上げた Merleau-Ponty 1955 第 2 章「「西欧」マルクス主義」におけるルカーチ論の一部として，前資本主義社会の特徴を指摘したものだと言える。ただ，今はそうした全体の文脈よりも，間世界が「血縁関係や性的関係や神話的親縁関係」であると規定されていることに注目したい。

さらに，この引用箇所はコレージュ・ド・フランス講義要録の 1953-54 年度講義「歴史理論のための資料」において次のように言い換えられることになる。

「いわゆる原始的な文明においては，集団生活は一部想像的なところがあり，経済的に解釈することのできる諸事実のあいだに，神話によって埋められるしかない間隙や間世界があるのだ。神話は，『イデオロギー』ではない。つまり発見さるべき経済的実在を覆い隠しているものではなく，ある固有の機能を有している。というのも，これらの社会は，社会を自然に結びつけている『臍の緒』をまだ断ち切ってはいないからである。」(Merleau-Ponty 1968: 52-53＝1979: 37)

ここで注意すべきなのは，「間隙や間世界 (des lacunes ou des intermondes)」というかたちで，間世界と等価なものとして間隙 (lacune) という言葉が使われていることである。この言葉は，隔たり (écart) やへこみ (creux) などと並び中期以降のメルロ＝ポンティにおいて重要な位置を占めるものであると言える。これについては，Merleau-Ponty 1960, 1969 などで展開されている言語論が参考になる。以下のようにメルロ＝ポンティの中期言語論は，意味とは諸記号間の差異であるというソシュールの考え方に大きな影響を受けている。

「我々がソシュールから学んだのは，記号というものが，ひとつずつでは何ごとも意味せず，それらはいずれも或る意味を表現するというよりも，その記号自体と他の諸記号とのあいだの意味のへだたりを示しているということである。」(Merleau-Ponty 1960: 49＝1969: 58)

メルロ＝ポンティは，このような諸記号間の差異を，より簡単に言えば諸記号のあいだを言い表すものの 1 つとして間隙という言葉を用いているのである。例えば，原初的記号とでも言える音素について「これら最初の音素的対立は，きわめて間隙 (lacunaires) の多いものでありうる」(ibid.: 50＝59) という指摘を見い出すことができる。ここでは，メルロ＝ポンティの言語論を追尾することが目的ではないので，以上のようなごく簡単な指摘に留めておきたい。ただ，以上の指摘からでもメルロ＝ポンティにおける間隙という言葉のもつ意義は示しえたのではないだろうか。つまり，それは，繰り返すことになるが記号と記号のあいだで意味を生じさせるものなのだと言える。

では，先程の引用 (Merleau-Ponty 1968: 52-53＝1979: 37) でこの間隙と等値させられていた間世界に戻って考えてみたい。それは，「ある経済的解釈をゆるすような社会生活の諸断片のあいだ」に存在するものであり，「血縁的関係や性的関係や神話的親縁関係」といった意味体系を示すものであった。まず，経済的諸断片のあいだにおける意味という点では，先程言及した言語論における間隙の役割とある程度までパラレルなものを指摘しうる。さらに，ここから間世界概念の特性としての〈あいだ〉がいかなるものであるかということも理解することができる。「血縁的関係や性的関係や神話的親縁関係」は，経済的解釈を許す諸事実のあいだに存在し「ある固有の機能を有している」，このことは，間世界である血縁的関係などは，それ自体としては経済的解釈には還元しえないものとして存在していることを示しているのである。経済的諸事実のあいだに，それに還元しえないものが存在していること，すなわち間隙という言葉がしばしば空隙とも訳されているように，そこには否定性が含み込まれていることを指摘することができる。間世界概念によって示される〈あいだ〉の特性とは，この否定性のことなのである。

メルロ＝ポンティの議論が取り上げられる際，その世界観がしばしば予定調和的なものとしてイメージされることがあるが，この否定性の概念は，そのイメージに修正を迫ることになる。なぜなら，この概念は，世界を安易に統一的・同一的なものとして捉える議論に対する批判として用いられるものであり，さらに言えば，世界における何らかの欠落を示すためのものだからである。

では，世界におけるどのような欠落なのか。言い換えれば，前節までにあげた間世界概念の3つの位相それぞれのうちに，この〈あいだ〉としての否定性は，具体的にどのようなかたちで見い出すことができるのだろうか。1つ目は，知覚的世界であるが，これについては以下の箇所に注目することから始めたい。

> 「私が子どもを知覚するとき，子供はまさしくある隔たり（現前不可能なものの本原的現前）において与えられる。私にとっての私の知覚的体験も同様であり，私の他我も同様であり，前分析的な物も同様である。そこには，我々を織りなしている共通の組織がある。それが，つまり野生の存在である。」(Merleau-Ponty 1964: 253＝1989: 291)（傍点メルロ＝ポンティ）

まず最初に問われるべきは，知覚的世界における〈あいだ〉とは，何と何の〈あいだ〉であるかだが，これについては見るものと見られるものの〈あいだ〉であるととりあえず言うことができる。そして，上記の引用で言うならば，その見るものと見られるものの〈あいだ〉には隔たりが存在する。これは，見られる対象が物であろうと他者であろうと変わることはない。ただ，この隔たり自体は見えないもの（現前不可能なものの本原的現前）であり，私の見るという経験は，この見えない隔たりにおいて与えられているのである。すなわち，「見えるものそれ自体が見えない骨組を持っている」(ibid. 265＝311) のであり，この見えないものこそが知覚的世界における否定性なのである。メルロ＝ポンティは，このような見えるものを支える「見えない骨組」のことを，この他に「世界の幅」(ibid. 267＝315)「次元」(ibid. 267＝315)「奥行」(ibid. 268＝316) といった概念を用いて言い表している。

ここでもう1度，Merleau-Ponty 1964: 114-115＝1989: 120 に戻ってみよう。そこでは，知覚的世界は「私のさまざまな所見の交叉点や私の所見と他者たちの所見の交叉点」にあるとされていた。この箇所に即して言うならば，間世界としての知覚的世界における〈あいだ〉とは，ある視角と別の視角の〈あいだ〉のことであり，この〈あいだ〉（交叉点）にこそ，見られるものが存在していることになる。先程の議論では，単に見るものと見られるものの〈あいだ〉としていたのだが，より間世界概念に即して見ていくならば，見るもの（視角）が複数想定されており，そこにおける〈あいだ〉が問われているのだと言える。メルロ＝ポンティにおいてある視角とは異なる別の視角とは，どのようなかたちで存在すると考えられているのだろうか。この問題を考えるために，先にあげた見えるものを支える「見えない骨組」の1つである「奥行」を取り上げてみたい。メルロ＝ポンティは「この奥行がなければ，世界もなければ〈存在〉もないことになろう」(ibid. 268＝317) と主張する。彼によれば，この奥行とは私がある1つの視点をとることによって開かれてくるものだという (ibid. 268＝316)。私がある1つの視点をとり奥行が開かれ，それによって物を見ることができるということ，ただこれは同時に，物の側からすればその視点からは見ることができない部分（背あるいは裏面 (ibid. 268＝316)）が生じることでもある。このように奥行が開かれることによって物に見えない部分が生じること，これをメルロ＝ポンティは決して否定的に捉えているのではなく，「物の『開在性』」(ibid. 268＝317) と呼んでいる。この物

の「開在性」とは，奥行によって物に見えない部分が生じるのだが，まさにその奥行によって物が別様の視角から見られる可能性を持つこと，すなわち「他者に見えるものに開かれて」(ibid. 265＝312) いることなのである。このように，ある視角とは異なる別の視角から見ることとは，奥行という「見えない骨組」によって可能になるのである。言い換えれば，間世界としての知覚的世界において複数の視角の〈あいだ〉（交叉点）に存在する見られるものとは，奥行という「見えない骨組」に支えられているのである。ここで間違いのないよう指摘しておくべきは，間世界としての知覚的世界にとって，視角が 1 つだけであるのか，実際に複数存在するのかは左程重要なことではない。メルロ＝ポンティが言いたいのは，視角が 1 つだけであっても奥行によって他なる視角が存在する可能性に開かれていることなのであり，その意味で知覚的世界とは，つねに間世界なのである (Merleau-Ponty 1964: 114-115＝1989: 120)。

次に歴史的世界について見ていこう。この歴史的世界における〈あいだ〉とは，例えば Merleau-Ponty 1964 に「私の過去と私の現在のあいだ」(ibid. 268＝316) とあるように過去と現在の〈あいだ〉のことだと言える。ただ，過去と現在の〈あいだ〉と言っても，我々は常に現在にしか立つことができない。そのため，ここで想定されているのは，第 6 節で指摘する現在における過去の理解であったり，あるいは現在という歴史，すなわち我々が置かれた現状への理解（「現在の現在自身による解明」(Merleau-Ponty 1955: 165＝1972: 161)）のことであると言える。メルロ＝ポンティは，この現在という時制の特徴を以下のように述べている。

> 「少なくともそれ（―歴史における知識の次元：引用者）が現在という大きく口をあけた間隙 (lacune) をともなっているというその一事からしても，歴史の全体はなお依然として行為であり，行為はすでにして歴史なのだ。」(Merleau-Ponty 1955: 19＝1972: 13)

上記の引用中に「現在という大きく口をあけた間隙」とあるように，現在は否定的なものとして捉えられている。問題は，この現在が持つ否定性とは具体的にどのようなものであるかだが，これについては，メルロ＝ポンティの以下の指摘を見てみよう。

> 「話が現在ということになると，これは我々自身のことであるし，存在するために我の同意や拒否を待っているものである。過去に関して通則になっている判断中止も，現在に関しては不可能である。事を決定するために，事態がかたちをととのえるのを待つといってみたところで，それもまた事態の成行きにまかせようと決定することにほかならない。ところで，現在の身近さは，我々にその責任を負わせるものではあるが，だからといってそれだけ我々を事象そのものに近づかせてくれるわけではない。今度は距離が欠けているために，我々には事象の一面しか見えないということになる。」(ibid. 19＝13)

最後の 1 文に明確に見て取ることができるように，ここでの否定性とは現在において我々が自らの置かれた事態を完全に把握することができないことだと言える。しかしながら，我々は「事象の一面しか見えない」にもかかわらず，そこで何らかの決定をしなければならない，その意味で現在とは「我々が生きるやいなやそれに向けられる法廷」なのである。

最後に社会的意味世界であるが，そこにおける〈あいだ〉とは何と何の〈あいだ〉なのだろうか。第4節では，「私の諸行為の交叉点や私の行為と他者たちの行為の交叉点」というメルロ＝ポンティの指摘に間世界としての社会的意味世界を見い出したのであった。このうち，前半部の「私の諸行為の交叉点」とは，私の過去の行為と現在の行為の交叉点のことを意味しており，どちらかと言えば過去と現在の〈あいだ〉としての歴史的世界に関わってくるものである。社会的意味世界としてより重要なのは，後半部の「私の行為と他人たちの行為の交叉点」という指摘であり，そこでの〈あいだ〉とは自己と他者の〈あいだ〉なのである。そして，メルロ＝ポンティは，この自己と他者の〈あいだ〉にある否定性を以下のように指摘している。

> 「私的な歴史においても公共の歴史においても，意識と他者との関係の公式は『彼か私か』ではない，つまり独我論か純粋の自己犠牲かの二者択一ではない。なぜなら，その関係はもはや二つの〈対自〉の対立ではなく，決して互いに一致することなしに唯一の世界に属し合っている二つの経験の絡み合いだからである。」(ibid. 278＝277)（傍点引用者）

自己と他者が決して一致することなく同一の世界に所属していること，これはMerleau-Ponty 1964: 114-115＝1989: 120にある「同一の或るものの差異」を歴史社会論の文脈で表現したものであると言える。また，Merleau-Ponty1964のなかにも自己と他者の「さまざまな共立不可能性を通してその統一をかたちづくっている世界」(Merleau-Ponty 1964: 264＝1989: 310)という指摘が見受けられる。このように社会的意味世界における否定性とは，自己と他者の〈あいだ〉に横たわる差異のことなのである。

以上，知覚的世界，歴史的世界，そして社会的意味世界という間世界概念の3つの位相各々においてそこに存在する否定性を指摘してきた。ここで確認しておきたいのは，各々の世界で指摘された否定性は，単にその世界の一要素だと言うのではなく，その世界の存立そのものを支えるものだということである。まず，知覚的世界においては見ることが「見えない骨組」に支えられていた。次に，歴史的世界は，現在という不確定な場でなされる歴史理解に準拠しているものであった。そして，社会的意味世界とは，自己と他者の「さまざまな両立不可能性を通してその統一をかたちづくっている世界」なのであった。このように，間世界の各位相は，それぞれが持つ否定性によって成り立つものなのであり，Merleau-Ponty 1964: 114-115＝1989: 120の表現を借りるならば，我々の住む世界は「極端な隔たり」を持つがゆえに「拒みえない凝集力」が働くことになるのである。

6. 選択のとりあげなおし

ここまでの議論でメルロ＝ポンティが考える世界を，知覚的世界，歴史的世界，およびシンボルを媒介とした諸行為からなる社会的意味世界という3つの位相から構成されるものとして提示することができた。さらに，これら3つの世界各々は否定性を含み込んだかたちで成り立つものであった。以上の議論をふまえたうえで，本節と次節ではもう1つの問い，すなわち制度変容に関わる問いに取り組んでいきたい。この問いについては，本稿の最初で制度化されたものはとりあげなおされうるものである，というメルロ＝ポンティの主張をあげ，そこに制度変容をもたらす行為を読み取る可能性を指摘した。本節では，このとりあげなおしが，メルロ＝ポンティの歴史社会論(Merleau-Ponty 1955)のなかで制度化概念における行為の1つとして，具体的にどのようなかたちで見い出すことができるかを考えてみ

たい。

議論の出発点として第4節のなかで積み残しになっていた問題に目を向けることから始めよう。第4節では，歴史的世界のなかから第3節でなされた歴史哲学的議論とは異なるものとして，我々が織りなす諸行為の次元を抽出してきた。ただ，そこでは我々が織りなす諸行為がどのようなかたちで歴史とつながりを持つのかという両者の関係性を問う作業はなされていなかったと言える[6]。言い換えれば，「歴史の全体はなお依然として行為であり，行為はすでにして歴史なのだ」というメルロ＝ポンティの指摘の内実を問う作業がまだ残されているのである。本節では，この問いを導き糸としてメルロ＝ポンティの制度化概念における行為の次元を探っていきたいと思う。

メルロ＝ポンティは Merleau-Ponty 1955 のなかで，「歴史の論理とその迂路，歴史の意味と歴史のうちにあってその意味に抵抗するものとを同時に理解するために」(Merleau-Ponty 1955: 93＝1972: 88) 必要なものとして自身の制度化概念を指摘したうえで以下のように述べる。

> 「制度というものは，もう一つの自然のように因果法則に従ってではなく，つねにその制度が何を意味しているかに従って発展するのであり，また変わることなき観念に従ってではなく，自分にとっては偶然なさまざまな出来事を多少なりともみずからの法則に従わせながら，しかもそれらの出来事の示唆によってみずからも変わるがままになるといった仕方で発展するのである。あらゆる偶発事によって引き裂かれはするが，その制度のうちにとりこまれながらも生きようと望む人間たちの無意識なふるまいによってつくろいなおされるこの横糸には，精神という名も物質という名もふさわしくないのであり，それにふさわしいのはまさしく歴史という名前である。『人と人との関係』を告げ知らせるこの『物』の秩序は，ふたたびそれを自然の秩序に結びつけるすべての重苦しい諸条件に服しやすいと同時に，人間生活が考案するすべてのものに開かれてもいるのである。これは現代の言葉で言えば，シンボリズムの場ということになるわけであろうが，マルクスの思考もここにこそその活路を見いだすべきだったのである。」(Merleau-Ponty 1955: 93-94＝1972: 88)

以上の引用からメルロ＝ポンティが歴史を自身の制度化概念から理解しようと試みていることが分かる。また，ここでは指摘するだけに留めるが，第4節で触れたシンボリズムという概念が出てきていることにも着目しておきたい。ただ，この箇所では，制度化概念は歴史の意味の次元に定位していると言え，ここから直接に行為の次元を指摘することは難しい。ここでヒントとして注目すべきは，引用中に出てきている「横糸 (trame)」という言葉である。この言葉は他の箇所でも「歴史の横糸になるのは，もろもろの力ないし制度となった意味の生成である」(ibid. 50＝46) というかたちで使用されており，歴史における意味の問題と関連させて考えていくべきものである。メルロ＝ポンティは，自身のウェーバー論でその歴史的意味について以下のように主張している。

> 「我々は，西欧の法律や科学や技術や宗教のうちに透かし模様のようにして「合理化」という意味を認めることになるのである。しかし，それはあくまで後になってからのことでしかない。つまり，これらの諸要素のそれぞれがこうした歴史的意味を手に入れるのは他の諸要素と出会うことによってなのだ。」(ibid. 28＝23)

諸要素が出会うことによる歴史的意味の生成，ここにメルロ＝ポンティはウェーバーに依拠するかたちで「選択の親縁性 (parenté de choix)」(ibid. 30＝24) を見いだすことになるのだが，さらにこれを横糸という言葉を用いて以下のように表現することになる[7]。

「宗教，法律，経済というこの３つの次元のどれか１つに属しているという事実は，どれにしたところで他の２つの事実にも依存しているのであるから，この３者はただ１つの歴史を形成しているわけであり，しかもそれはこの３つの次元がいずれも人間の選択という１つの横糸に織りこまれていることによってなのである。」(ibid. 31＝25)

宗教，法律，経済という３つの次元が「人間の選択という１つの横糸に織りこまれ」ることによって１つの歴史を形成すること，ここに選択という１つの行為を見いだすことができる。その意味で「行為はすでにして歴史なの」だと言える。しかし，これだけでは，単に我々の行為の積み重なりが歴史をつくり出すといった一般論から大きく抜け出るものではない。これに加えて問われるべきは，「過去に対する我々のかかわり方」(ibid. 32＝26)，すなわち歴史理解の仕方であり，メルロ＝ポンティがウェーバーを取り上げる理由の一つもこの点にあった。さらに，彼が歴史理解のために自身の制度化概念を持ち出してきていることは先に述べたとおりである。この歴史理解についてメルロ＝ポンティの見解が具体的に示されているのは以下の箇所である。

「歴史の理解ということは，勝手気ままに選ばれたカテゴリー体系をもちこむことではなく，我々が我々自身のものである一つの過去をもち，多数の他者の自由の所業を我々の自由のなかでとりあげなおし (reprendre)，我々の選択によって彼らの選択を，また彼らの選択によって我々の選択を照らし出し，相互にその選択を修正し合い，ついには真理のうちに生きるといったそうした可能性を想定するだけのことでしかないのだ。」(ibid. 35＝29)

上記の引用によれば，歴史理解とは自己および他者の選択をとりあげなおし，相互に照らし出し，修正し合うことなのである。ここでもう１度，歴史的世界が「私の諸行為の交叉点や私の行為と他者たちの行為の交叉点」において成り立つものであるという指摘を思い出しておこう。以上の歴史理解についての議論をふまえるならば，諸行為の交叉点でなされるのは，過去の私と現在の私のあいだで，さらには私と他者たちのあいだでなされる選択という行為のとりあげなおしなのだと言える。これは，メルロ＝ポンティの言葉で言えば，「歴史のなかで基本的選択の意味の解読を実行すること」(ibid. 48＝43) なのであり，より具体的には自身のウェーバー論に即して以下のように指摘されることになる。

「カルヴィニズム的選択は，あらゆる他の選択と対比されることを要求するし，またそれらの選択も，もしその１つ１つが結局は理解されねばならないとすれば，すべてが合してただ１つの行為を構成することを要求する。」(ibid. 48＝43)

カルヴィニズム的選択が持つ意味は，他の選択との関係性のなかでのみ理解しうる。このことを第３節の議論に置きなおして言えば，カルヴィニズム的選択を理解するためには，それを含めた「歴史の網

の目」全体が志向されなければならないと言える。メルロ＝ポンティが考える歴史理解とは，歴史の関係性全体のなかから「歴史状況の内的諸関係に適応した行為」を「ただ 1 つの行為」としてとりあげなおしてくることなのである。そして，現在において過去の選択をとりあげなおすという以上のような歴史理解の作業，これ自体もまた何らかの選択という行為なのであり，その意味で「歴史の全体とはなお依然として行為」なのである。ここまで見てきて，本稿の最初で指摘したとりあげなおしという言葉が意味するところも少しは具体的になってきたのではないだろうか。それは，自己のものであれ，他者のものであれ選択という行為をとりあげなおすことなのである。

7. 結論

前節の議論では，本稿の最初に指摘したとりあげなおしという行為をメルロ＝ポンティの歴史社会論のなかに探し出す作業を行った。そこで見いだされたのは，選択のとりあげなおしであった。ただ，前節ではそれを指摘したに留まり，この行為によって具体的にどのようなかたちで制度変容が起こるかについては，課題として残されたままであった。本稿の最終節として本節ではこの課題に一定の見通しを与えておきたいと思う。

まず，議論の手がかりとして Merleau-Ponty 1968: 60＝1979: 44 にもう 1 度目を向けてみよう。注目すべきは，「制度化されたものは，その主体自身の行為の直接の反映ではな」いとの指摘である（傍点引用者）。この指摘の後に，本稿ではとりあげなおしという行為を見いだしてきたのだが，ここで考えてみたいのは，このとりあげなおしという行為自体が持つ主体性をどう位置付けるべきかである。傍点部が示しているのは，メルロ＝ポンティが制度化を行為主体によるはたらきかけの直接的結果としては捉えていないということである。また，Merleau-Ponty 1955: 93-94＝1972: 88 においても「無意識なふるまいによってつくろいなおされる」とあるように，明確な目的を持った主体的行為が想定されているとは言い難い。このことから，今まで見てきた選択という行為，さらにはそれをとりあげなおすという行為においても，その主体性に重きが置かれていると言うことはできない。では，なぜメルロ＝ポンティの制度化概念にあって行為主体は左程重要な位置づけを与えられていないのだろうか，さらにそのことが制度変容にどのような影響を与えることになるのだろうか。この問題を考えていく出発点として次のことを確認しておくことから始めたい。それは，今まで指摘してきた選択という行為は，その行為が意味をともなったものであるがゆえにとりあげなおすことが可能になるということである。言い換えれば，とりあげなおしとは，選択という行為に付与された意味のとりあげなおしのことだと言える。本稿では，この意味をともなった行為については第 4 節でシンボル的行為として提示しておいた。メルロ＝ポンティによれば，あらゆる行為は，シンボル的行為なのであった。では，こうした行為への意味付与という視点から以下にあげるメルロ＝ポンティの指摘を見る時，どのようなことが言えるだろうか。

> 「行為は，常に約束され義務づけられている以上を掌握することを余儀なくさせるものであり，また同時に失敗しうるものでもある。」(Merleau-Ponty 1955: 271＝1972: 271)

上記の引用は，メルロ＝ポンティ特有の両義的な表現が使用されており，決して分かりやすいものではない。ただ，この箇所が「私の意識の独立性」(ibid. 271＝270) を唯一の行動原理とするサルトルへの批判として提出されていること考慮に入れるならば，行為と意味の関わりについて少なくとも次のこと

は言えるのではないだろうか。それは，行為とは，一良い意味でも，また「失敗しうる」という悪い意味でも一行為者の意図をこえたかたちで意味づけられるものだということである。本稿では，この点に主体的行為のはたらきかけによるものとは別の制度変容のあり方を探し求めてみたいと考えている。そのためには，行為への意味づけが，何故行為者の意図をこえたかたちでなされるのかが問われなくてはならない。メルロ＝ポンティによれば，それは行為が「ありのままの他者や我々が作り他者が作る歴史に差し向けられているから」(ibid. 271＝271) なのである。この指摘のなかに他者と歴史という要素を見いだすことができるが，この２つはそれぞれこれまで見てきた間世界概念のなかの社会的意味世界と歴史的世界にあたるものだと言える。このことから，行為に行為者の意図をこえた意味づけがなされる理由も分かってくるのではないだろうか。それは，行為が世界のなかに存在し，世界の構造と何らかの関係をとり結んだかたちで成り立つものだからである。そして，ここで言う世界の構造とは第５節で見た否定性のことである。以下では，より具体的に社会的意味世界および歴史的世界のなかで行為が行為者の意図をこえてどのように意味づけられるかを見ていくことにしよう。

１つ目は，社会的意味世界であるが，ここでの否定性とは第５節で述べたように他者の存在のことであり，より正確に言えば，それは自己と他者のあいだに横たわる差異のことである。我々の行為は，他者によってとりあげなおされることで自らの意図をこえた意味づけがなされるようになる。ただ，この他者によるとりあげなおしという指摘自体は，すでに Merleau-Ponty1968: 60＝1979: 44 のなかにも見いだすことができる。ここで注意すべきなのは，他者によるとりあげなおしによって意味付与がなされると言っても，そこで付与される意味とは他者の意図を直接反映したものではありえないということである。もしそうでなければ，自己の意図の裏返しとして他者の意図を持ち出してきているだけになってしまう。重要なのは，行為に付与される意味とは，「意味とはつねに隔たりである」(Merleau-Ponty 1964: 239＝1989: 266) と指摘されているように，あくまでも自己と他者の関係性のうえに，すなわち両者のあいだに横たわる差異のうえに成り立つものであり，どちらか一方の意図に還元しうるようなものではないのである。

次に歴史的世界については，メルロ＝ポンティが選択という行為について以下のように述べているのを見ておこう。

> 「我々が何ものかを選択するのは，決してそれが現にあるところのもののためではなく，単にかつてそれをなしたのは自分だと言うために，はっきり限定しうる過去を構成するためにである。我々は，決してあれないしこれになること，あれないしこれであることを選択するのではなく，あれないしこれであったことを選択するわけである。我々は，状況の前におり，我々は検討し熟考していると思っているが，しかし実は，我々はすでに態度決定をし，行動したのでありある過去の所持者である自分を突然発見するのだ。それがどのようにして我々のものになったかは，誰にも解りえないことであり，それは自由の事実なのである。」(Merleau-Ponty 1955: 264＝1972: 264)

上記の引用におけるメルロ＝ポンティの主張を一口で言うならば，選択という行為は未来に向けてのものではなく，過去に向けてのものだということである。ではなぜ選択は未来に向けてのものではないのか，ここに先程述べた我々が住む世界の否定性という構造が関わってくることになる。具体的に言えば，第５節で指摘したように我々は「現在という大きく口をあけた間隙」にしか立ちえず，そこにおい

て何らかの選択をするしかない。しかしながら，現在において我々は自らの置かれた状況を一面的にしか把握することができない。そのため，我々が現在において自らの意図のもとに何かを選択したと考えていたとしても，それが将来において意図した通りの選択であるという保証はないのである。可能なのは，現在の私の「選択に対して私の生涯における先行の選択を限りなく見いだしていくこと」(ibid. 274＝274) であり，それによって自分の過去を構成していくことなのである。このように，我々は自らが何を選択しているのか，あるいは自らの選択が何を意味するのかを事後的にしか知りえない。ただ，メルロ＝ポンティは，これを否定的に捉えているのではなく，そこに「自由の事実」を見いだしているのである。

ここまでの議論で社会的意味世界と歴史的世界のなかで行為が行為者の意図をこえてどのように意味づけられることになるかを見てきた。では，以上の議論から制度変容のあり方についてどのようなことが言いうるだろうか。まず，前者について言えば，行為に付与される意味とは自己と他者の関係性のうえに成り立つものであり，それゆえ意味の変容とは関係性の変容として捉えることができる。そして，その意味の変容が制度変容につながることを考えれば，制度変容もまた自己と他者の関係性の変容にその基盤を持っていると言える。次に，後者の歴史的世界においては，選択という行為に付与される意味の事後性が指摘された。本稿では，制度変容をもたらすものとして選択のとりあげなおしに注目してきたわけだが，前節で述べたようにこのとりあげなおし自体も現在において何がしかを選択するという行為なのである。そのため，我々は現在においてどのようなとりあげなおしを行っているかを事後的にしか知ることはできない。すなわち，我々はいかなる制度変容が生じているのかを知るのは常に事後的にでしかないのである。

以上，本稿では，間世界概念の３つの位相を分析することから始まって，メルロ＝ポンティが考える制度変容の特徴を指摘するところにまでたどりついた。この議論によって，我々が普段感じている「社会的なものの持つ厚み」(ibid. 36＝31) をメルロ＝ポンティの言葉を通して少しでも明確にすることができたとすれば，本稿の試みは一応成功したと言えるのではないだろうか。

注釈

1) メルロ＝ポンティの制度化概念を概観し，それを社会学の制度論のなかに位置づける作業については，不十分ながら拙稿清水淳志 2007 で行った。
2) この間世界 (intermonde) 概念は，メルロ＝ポンティの議論のなかで何度も登場する概念ではない。このため，この概念に言及しているメルロ＝ポンティ研究は存在しても，これを中心的テーマとして扱っているものは見当たらないのが現状である。O'Neill1970 は，社会理論の視点からのメルロ＝ポンティ研究として有名であり，間世界概念についても知覚的世界 (O'Neill 1970＝1986: 87,250) と歴史的世界 (ibid. 225) という２つの位相各々に言及がなされている。ただ，オニールにあっては，本稿で社会的意味世界として抽出してきたような人々の行為の次元への注目は希薄だと言えるし，間世界の特性としての否定性については，部分的な指摘に留まっていると言わざるをえない。金田耕一 1996 は，メルロ＝ポンティの政治哲学を論じたものである。そのなかでは，「捉え直し (reprise)」（金田 1996: 188）や「人間的選択」(ibid. 199) といったメルロ＝ポンティの術語が重視されており，その意味で本稿第６・７節の議論と重なり合う部分があると言える。しかしながら金田には，選択やとりあげなおしといった行為を世界の構造との関係のなかで見ていこうとする視点が弱い。これは，金田の研究意図が「メルロ＝ポンティの『政治哲学』を『フランス実存主義の政治哲学』として読み解く」(ibid. 46) ことにあるためだと言える。間世界概念については，Merleau-Ponty 1955: 278＝1972: 278 が引用されているだけで，それ以上の言及はない。
3) 正確に言えば，この間世界概念の定義は，不十分なものである。なぜなら，鷲田の指摘にもう１度目を向けて見れば分かるように，我々は何かと何かの〈あいだ〉を理解するのみならず，何かと何かの〈あいだ〉で理解

しなければならないとされていたからである。我々は，世界であれ歴史であれその内部において理解しなければならない。こうした我々の内在性については，本稿では歴史の問題としてしか扱うことができなかった。歴史内部にあるものとしての我々は，歴史を作り出し，理解する主体である時もあれば，歴史によって生み出される客体である時もある。この主体/客体の可逆性は，知覚的世界にも適用されるべきものではないだろうか。すなわち，間世界としての知覚的世界を見ることと見られることが相互に転換する世界として描き出すことはできないだろうか。これは，今後の課題としたい。

4) ただ，メルロ＝ポンティが「それらの世界は，（中略）我々が見たり行ったりすることがそこに記入されて物や世界や歴史となるべき登記簿だからである」と主張する時，そこでは間世界概念に関して（知覚対象としての）物/世界/歴史という3つの位相が想定されていると言えなくもない。しかし，この場合世界が具体的に何を指しているのかはっきりしない。

5) 一見するとこの箇所は，第4節で指摘した社会的意味世界としての間世界に該当する好例に見えるかもしれない。しかしながら，ここは特別注意を必要とする箇所だと言える。それは，次の理由からである。この箇所は最初に「ルカーチの言うところに従えば」とあるように，メルロ＝ポンティがルカーチの主張(Lukács 1923)を要約しているところであり，そのなかでも特に，間世界は原文において«intermondes»というかたちでルカーチからの引用として表記されている。しかし，Lukács 1923 のなかに intermonde にあたる言葉やそれと同じ意味を持つと考えられる言葉を見い出すことはできないのである。このように，この箇所は間世界概念の説明としては難点を抱えており，そのため本稿では否定性という特性を示すためだけに用いることにした。

6) この点については，Merleau-Ponty 1955 と 1964 のあいだの間世界概念の変容としても考えることができるかもしれない。前者において間世界は，「歴史とかシンボリズムとか作られるべき真理」といったかたちで多少なりともまとまりをもったものとして捉えられていた。それに対し，後者ではそれは「私の諸行為の交叉点や私の行為と他者たちの行為の交叉点」であるとされ，関係概念として捉えられることになる。これは，鷲田の言う「実体」概念を関係論的に組み換えていくという作業をメルロ＝ポンティが押し進めていった結果であると見ることもできる。

7) ここでメルロ＝ポンティは，明らかに選択という言葉を宗教や法律といったマクロな領域から人々の行為というミクロな領域へと位相をずらして使用している。同じことは，第4節で指摘したシンボリズムあるいはシンボルという言葉にも言える。メルロ＝ポンティにあってどうしてこのような議論の仕方が可能になるのだろうか。もう少し一般的な問いとして提出すれば，メルロ＝ポンティは客観的意味と主観的意味の区別をどう考えているのだろうか。これも今後の課題とせざるをえない。

※引用に関しては，原則邦訳を参照したが，部分的に訳語・訳文を変更した箇所がある。

参照文献

金田耕一，1996,『メルロ＝ポンティの政治哲学―政治の現象学―』早稲田大学出版部

Lukács, G., 1923, *Geschichte und Klassenbewußtsein, Studien über Marxistische Dialektik*, Berlin: Der Malik-Verlag（＝城塚登・古田光訳『歴史と階級意識』1991 年，白水社）

Merleau-Ponty, M., 1945, *Phénoménologie de la perception*, Paris: Gallimard（＝竹内芳郎・木田元他訳『知覚の現象学』1・1967 年，2・1974 年，みすず書房）

———, 1955, *Les aventures de la dialectique*, Paris: Gallimard（＝滝浦静雄・木田元他訳『弁証法の冒険』1972 年，みすず書房）

———, 1960, *Signes*, Paris: Gallimard（＝竹内芳郎監訳『シーニュ』1・1969 年，2・1970 年，みすず書房）

———, 1964, *Le visible et l'invisible, suivi de note de travail*, Paris, Gallimard（＝滝浦静雄・木田元訳『見えるものと見えないもの 付・研究ノート』1989 年，みすず書房）

———, 1968, *Résumés de cours, Collège de France 1952-1960*, Paris, Gallimard（＝滝浦静雄・木田元訳『言語と自然 コレージュ・ド・フランス講義要録 1952-60』1979 年，みすず書房）

———, 1969, *La prose du monde*, Texte etabli et presente par Claude Lefort, Gallimard（＝滝浦静雄・木田元訳『世界の散文』1979 年，みすず書房）

O'Neill, J., 1970, *Perception, Expression and History; The Social Phenomenology of Maurice Merleau-Ponty*, Evanston: Northwestern University Press（＝奥田和彦編，宮武昭・久保秀幹訳『メルロ・ポンティと人間科学』1986 年，新曜社）

清水淳志, 2007,「社会学における制度論―メルロ＝ポンティとの「交差」から―」『人間と社会の探求』第 64 号
鷲田清一, 1997,『メルロ＝ポンティ―可逆性』講談社